

原 著

## 訪問看護婦と在宅療養患者に対するイメージ

關戸啓子<sup>1)</sup> 小野和美<sup>1)</sup> 田中美穂<sup>2)</sup> 内海 滉<sup>3)</sup>

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 保健看護学科<sup>1)</sup>

川崎医療短期大学 第一看護科<sup>2)</sup>

千葉大学 看護学部 看護実践研究指導センター<sup>3)</sup>

(平成8年11月20日受理)

## Images of Visiting Nurses and In-Home Patients

**Keiko SEKIDO<sup>1)</sup>, Kazumi ONO<sup>1)</sup>, Miho TANAKA<sup>2)</sup> and Ko UTSUMI<sup>3)</sup>**

<sup>1)</sup>*Department of Nursing, Faculty of Medical Welfare  
Kawasaki University of Medical Welfare  
Kurashiki, 701-01, Japan*

<sup>2)</sup>*Department of Nursing,  
Kawasaki College of Allied Health Professions  
Kurashiki, 701-01, Japan*

<sup>3)</sup>*Center of Education and Research for Nursing Practice  
Faculty of Nursing  
Chiba University  
Chiba, 260, Japan*

*(Accepted Nov. 20, 1996)*

**Key words** : images, visiting nurses, in-home patients, visiting nurse care, students in a nursing course

### Abstract

A questionnaire was used to investigate the images held by students in a nursing course about visiting nurses and in-home patients, before and after they actually practiced visiting nurse care.

The data from 45 respondents were analyzed by factor analysis. With regard to the images of visiting nurses, three factors emerged : the nurse's innate ability, professionalism and acquired skills. For in-home patients, four factors emerged : ability to live a full life, loneliness, attitude towards positive living and loss of vitality.

A comparison of the means of factor scores, before and after the students practiced

visiting nurse care, showed significant differences in some factors. Also, the factor scores were related to the students' desire to become visiting nurses as well as their desire to live at home if they should become terminally ill.

## 要 約

看護科学生を対象に、訪問看護婦と在宅療養患者に対するイメージについて、訪問看護実習前後にアンケート調査を実施した。

45名の学生から回答が得られ、訪問看護婦に対するイメージの回答を因子分析した結果、3因子が抽出され、「訪問看護婦の資質因子」「訪問看護婦の専門性因子」「訪問看護婦の技量因子」と解釈した。同様に、在宅療養患者に対するイメージの回答を因子分析した結果、4因子が抽出され、「充実した生活因子」「孤独な生活因子」「前向きな生き方因子」「生活意欲減退因子」と解釈した。

因子得点を訪問看護実習前後で比較したところ、有意差が認められた因子があった。また、因子得点と将来、訪問看護をしてみたいか否かの回答に関連が見られた。同様に、自分の終末期は在宅で療養したいか否かの回答にも関連が見られた。

## 緒 言

1988年の医療法改正以後、病院の在院日数の短縮化に伴って、多くの一般病院が訪問看護への取り組みを始めた<sup>1)</sup>ために、看護婦の活動の領域として訪問看護も定着したかに思われる。しかし、看護婦の仕事をする場所は病院または診療所に集中しており、一般人も医療に関係する人も、「看護婦」といえば病院とか診療所が頭に浮かんでくるほど、そうしたイメージに慣れ親しんでいる<sup>2)</sup>。ましてや、「患者」といえば病院に入院しているイメージであろうと思われる。

イメージとは、何らかの知覚像的なものを意味し、対象が現存しなくても感じとられる（ないし経験される）一種の普遍的な認知現象で、しかも、同時に個人差が大きいことも確かで、イメージは個人の内的状態や生きる姿勢、状況などによって異なる<sup>3)</sup>。そこで、看護科学生が訪問看護実習を行うに際して、看護科学生が抱えている訪問看護婦と在宅療養患者に対するイメージを調査し、訪問看護に関するイメージの構造と実習や自己の将来像との関連を検討した。

## 方 法

### 1. 調査対象と調査時期

対象は、1994年1月から1995年3月の間に訪

問看護実習を体験した某医療短期大学看護科学生で、2年次後半から3年次の女子学生である。

訪問看護実習は、実習病院が行っている訪問看護に同行する形態で実施している。実習内容は、学生にとって1回のみ体験であるために、訪問看護婦が実施する看護ケアを多少手伝う程度で、ほぼ見学実習となっている。実習病院が行っている訪問看護の対象はさまざまであるが、今回、調査対象にした学生が訪問したのは、自宅での死を希望し、終末期を在宅で療養している患者であった。

訪問看護実習前に、実習グループ毎に調査の趣旨を説明し協力が得られた学生にアンケートを依頼した。かつ、患者の急変などによる緊急訪問に同行した学生は、調査対象から外し、定期的な訪問に同行した学生を対象とした。その結果、調査は45人の学生を対象に実施し、回収率・有効回答率ともに100%であった。

### 2. 調査方法と調査内容

訪問看護実習前後に、同じ内容の無記名式質問紙を配付し、その場で回収した。

調査では、訪問看護婦に対するイメージと在宅療養患者に対するイメージについて各18項目の質問を設け、5選択肢について回答を求めた。さらに、イメージと自己の将来像との関連をみるために、将来、訪問看護婦をしてみたいか否

かと、自分の終末期は在宅で療養したいか否かについて回答を求めた。

3. 分析方法

イメージの構造については、イメージに対する回答を得点化し、因子分析を行った。因子分析の方法は主因子解の後、バリマックス回転をかけた。イメージと要因の関連については、因子得点の平均を比較することによって検討した。

回答に対する得点は、「そう思う」に5点を、「どちらかというと思う」に4点を、「どちらともいえない」に3点を、「どちらかというと思わない」に2点を、「思わない」に1

点を与えた。

結 果

1. 訪問看護婦に対するイメージ評点

18項目の訪問看護婦に対するイメージにおける回答結果は、図1のとおりである。訪問看護実習前後において学生の回答に有意差を認めた項目は6項目で、訪問看護実習後に「2. 高度な技術が必要」「10. 自立性が高い」「13. 体力が必要」は「思わない」方へ、「14. 明るい」「16. 自由」「17. 楽しい」は「そう思う」方へ変化していた。

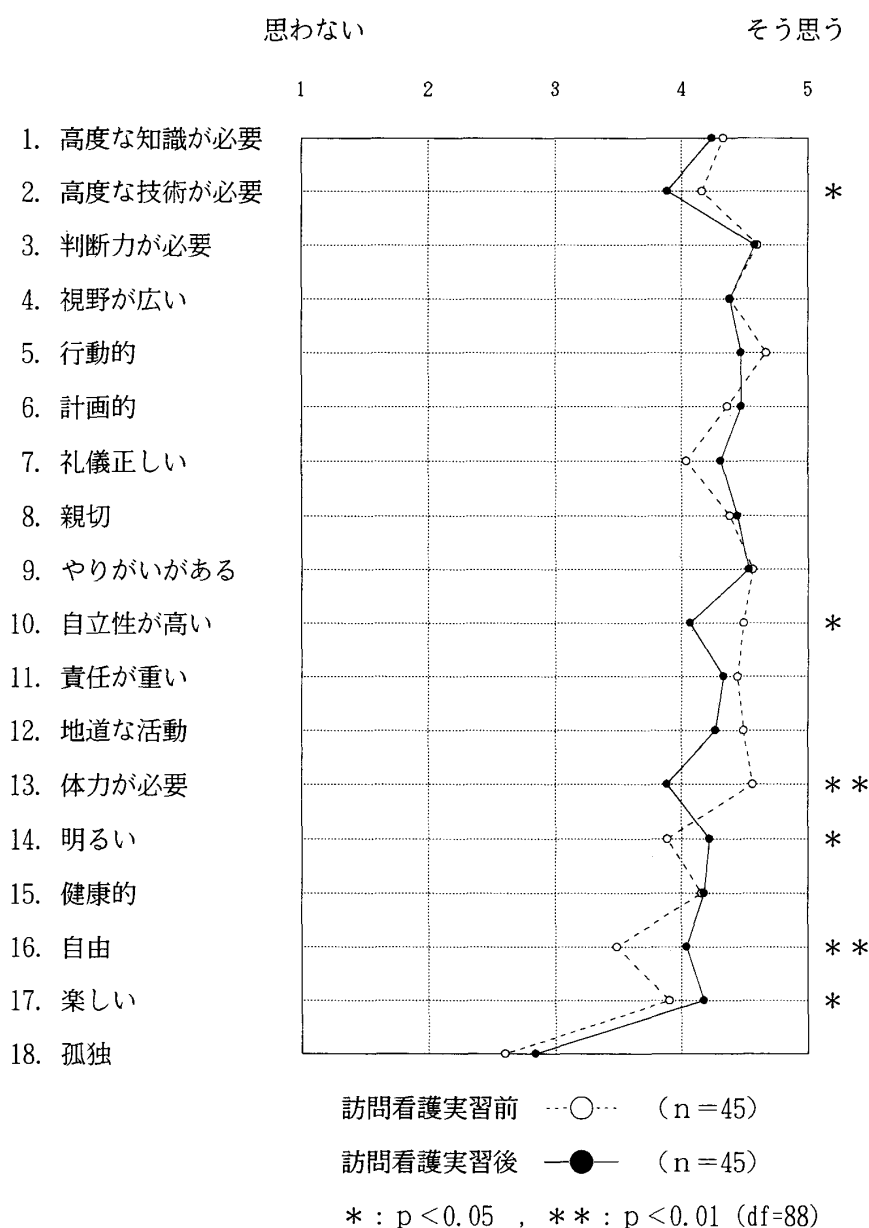


図1 訪問看護婦に対するイメージ評点

2. 在宅療養患者に対するイメージ評点

18項目の在宅療養患者に対するイメージにおける回答結果は、図2のとおりである。訪問看護実習前後において学生の回答に有意差を認められた項目は4項目で、訪問看護実習後に「19. 幸せ」「28. 清潔」「31. 明るい」は「そう思う」方へ、「22. さみしい」は「思わない」方へ変化していた。

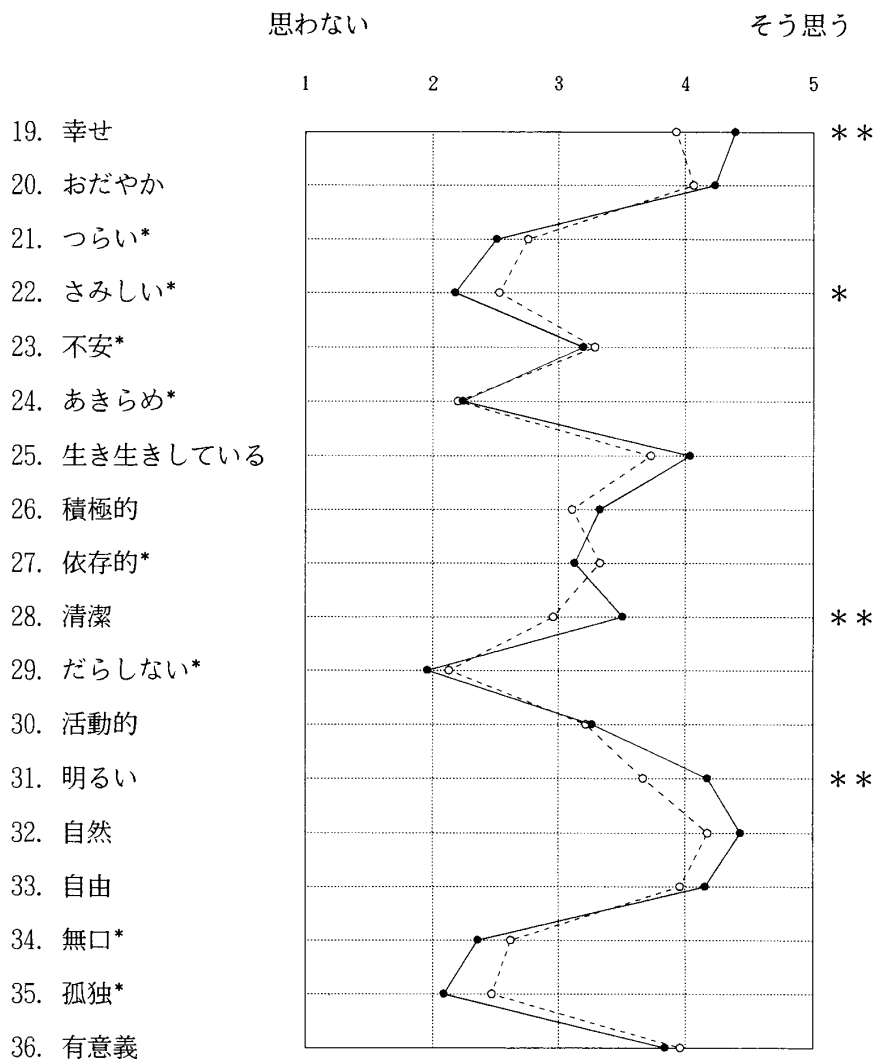
3. 自己の将来像

将来、訪問看護をしてみたいと思いますかと、

自分の終末期は在宅で療養したいと思いますかという質問に対する回答結果は、表1のとおりである。訪問看護実習後には、将来、訪問看護をしてみたいとは思わないと回答した学生はいなかった。

4. 訪問看護婦に対するイメージの構造

訪問看護婦に対するイメージの因子分析結果は、表2のとおりである。3因子が抽出され、それぞれ「訪問看護婦の資質因子」「訪問看護婦の専門性因子」「訪問看護婦の技量因子」と解釈



\* の付してあるのは、否定的イメージからの質問である。

訪問看護実習前 ---○--- (n=45)

訪問看護実習後 —●— (n=45)

\* : p < 0.05 , \*\* : p < 0.01 (df=88)

図2 在宅療養患者に対するイメージ評点

した。

### 5. 訪問看護婦に対するイメージと各要因

訪問看護婦に対するイメージについて、各因子に対する因子得点を、訪問看護実習前後で比較した結果が表3である。「訪問看護婦の専門性因子」において、群間で有意差が認められた。

同様に、将来、訪問看護をしてみたいか否かの別で比較した結果が表4である。「訪問看護婦の資質因子」において、訪問看護をしてみたい

群とどちらともいえない群の間で有意差が認められた。また、自分の終末期は在宅で療養したいか否かの別で比較した結果が表5である。どちらともいえない群は、すべての因子において否定的イメージを示した。

### 6. 在宅療養患者に対するイメージの構造

在宅療養患者に対するイメージの因子分析結果は、表6のとおりである。4因子が抽出され、それぞれ「充実した生活因子」「孤独な生活因子」

表1 自己の将来像—訪問看護実習前後の比較—

<質問> 将来、訪問看護をしてみたいと思えますか	思	う	どちらとも いえない	思わない
	訪問看護実習前 (n = 45)	31人 68.9(%)		9人 20.0(%)
訪問看護実習後 (n = 45)	36人 80.0(%)		9人 20.0(%)	0人 00.0(%)

<質問> 自分の終末期は在宅で療養したいと思えますか	思	う	どちらとも いえない	思わない
	訪問看護実習前 (n = 45)	41人 91.1(%)		4人 8.9(%)
訪問看護実習後 (n = 45)	40人 88.9(%)		5人 11.1(%)	0人 00.0(%)

実習前後において有意差なし

表2 訪問看護婦に対するイメージの因子分析結果

Q-No. イメージ	f1	f2	f3	因子名
4. 視野が広い	0.746	0.128	0.119	訪問看護婦の 資質因子
8. 親切	0.587	-0.077	0.259	
15. 健康的	0.566	0.335	0.153	
7. 礼儀正しい	0.558	-0.091	-0.060	
3. 判断力が必要	0.520	0.343	0.499	
17. 楽しい	0.437	0.035	0.103	
14. 明るい	0.402	-0.036	-0.102	
10. 自立性が高い	-0.103	0.755	0.212	訪問看護婦の 専門性因子
13. 体力が必要	0.058	0.617	-0.001	
11. 責任が重い	0.141	0.569	0.343	
9. やりがいがある	0.380	0.566	0.143	
1. 高度な知識が必要	0.248	0.164	0.772	訪問看護婦の 技量因子
2. 高度な技術が必要	0.072	0.256	0.695	
3. 判断力が必要	0.520	0.343	0.499	

(累積寄与率 29.2%)

表3 訪問看護実習前後別因子得点 — 訪問看護婦に対するイメージ —

因子		f1: 訪問看護婦の 資質因子	f2: 訪問看護婦の 専門性因子	f3: 訪問看護婦の 技量因子
訪問看護実習前 (n = 45)	M	-0.108	0.224	0.048
	SD	0.913	0.764	0.911
訪問看護実習後 (n = 45)	M	0.108	-0.224	-0.048
	SD	0.843	0.919	0.813

\*: p &lt; 0.05

表4 将来、訪問看護をしてみたいか否か別因子得点 — 訪問看護婦に対するイメージ —

因子		f1: 訪問看護婦の 資質因子	f2: 訪問看護婦の 専門性因子	f3: 訪問看護婦の 技量因子
訪問看護をしてみたい (n = 67)	M	0.151	0.053	0.063
	SD	0.773	0.905	0.810
どちらともいえない (n = 18)	M	-0.512	-0.160	-0.197
	SD	1.066	0.752	1.013
訪問看護をしてみたくない (n = 5)	M	-0.175	-0.132	-0.139
	SD	0.988	0.848	1.013

\*\* : p &lt; 0.01

表5 自分の終末期は在宅で療養したいか否か別因子得点 — 訪問看護婦に対するイメージ —

因子		f1: 訪問看護婦の 資質因子	f2: 訪問看護婦の 専門性因子	f3: 訪問看護婦の 技量因子
在宅で療養したい (n = 81)	M	0.058	0.017	0.002
	SD	0.853	0.867	0.851
どちらともいえない (n = 9)	M	-0.521	-0.151	-0.019
	SD	1.010	0.933	0.995

「前向きな生き方因子」「生活意欲減退因子」と解釈した。

#### 7. 在宅療養患者に対するイメージと各要因

在宅療養患者に対するイメージについて、各因子に対する因子得点を、訪問看護実習前後で比較した結果が表7である。「充実した生活因子」において、群間で有意差が認められた。

同様に、将来、訪問看護をしてみたいか否かの別で比較した結果が表8である。「前向きな生き方因子」において、訪問看護をしてみたい群としてみたくない群の間で有意差が認められた。また、自分の終末期は在宅で療養したいか否か

の別で比較した結果が表9である。「充実した生活因子」「孤独な生活因子」「生活意欲減退因子」において、群間で有意差が認められた。

#### 8. 訪問看護婦と在宅療養患者に対する各イメージにおける因子の相関

各イメージに対する回答を因子分析することによって抽出された因子間の相関をみたのが、表10である。「訪問看護婦の資質因子」と「充実した生活因子」の間に有意水準1%の正の低い相関が認められた。

表6 在宅療養患者に対するイメージの因子分析結果

Q-No. イメージ	f1	f2	f3	f4	因子名
25. 生き生きしている	0.807	-0.124	0.205	-0.090	充実した 生活因子
19. 幸せ	0.751	-0.292	0.017	-0.046	
33. 自由	0.685	-0.145	0.104	0.054	
31. 明るい	0.657	-0.379	0.126	-0.223	
35. 孤独	-0.166	0.741	-0.144	0.083	孤独な 生活因子
21. つらい	-0.180	0.656	-0.120	0.092	
23. 不安	-0.042	0.641	-0.049	0.169	
22. さみしい	-0.391	0.635	-0.187	-0.044	
34. 無口	-0.311	0.503	-0.193	0.263	
30. 活動的	0.143	-0.130	0.770	-0.173	前向きな 生き方因子
26. 積極的	0.144	-0.270	0.658	-0.377	
36. 有意義	0.288	-0.072	0.400	0.047	
27. 依存的	0.060	0.066	-0.208	0.580	生活意欲 減退因子
29. だらしない	-0.249	0.354	0.004	0.436	
24. あきらめ	-0.355	0.363	-0.136	0.421	

(累積寄与率 48.0%)

表7 訪問看護実習前後別因子得点 — 在宅療養患者に対するイメージ —

因子		f1: 充実した 生活因子	f2: 孤独な 生活因子	f3: 前向きな 生き方因子	f4: 生活意欲 減退因子
訪問看護実習前 (n = 45)	M	-0.211	-0.056	0.079	0.065
	SD	0.934	0.905	0.810	0.695
訪問看護実習後 (n = 45)	M	0.211	0.056	-0.079	-0.065
	SD	0.976	0.845	0.909	0.807

\*: p &lt; 0.05

表8 将来、訪問看護をしてみたいか否か別因子得点 — 在宅療養患者に対するイメージ —

因子		f1: 充実した 生活因子	f2: 孤独な 生活因子	f3: 前向きな 生き方因子	f4: 生活意欲 減退因子
訪問看護をしてみたい (n = 67)	M	0.027	0.038	0.035	-0.052
	SD	1.008	0.879	0.901	0.751
どちらともいえない (n = 18)	M	-0.092	-0.072	0.026	0.092
	SD	0.849	0.944	0.774	0.762
訪問看護をしてみたくない (n = 5)	M	-0.030	-0.245	-0.556	0.365
	SD	1.091	0.547	0.288	0.735

\*\* : p &lt; 0.01

表9 自分の終末期は在宅で療養したいか否か別因子得点 — 在宅療養患者に対するイメージ —

因子		f1: 充実した生活因子	f2: 孤独な生活因子	f3: 前向きな生き方因子	f4: 生活意欲減退因子
在宅で療養したい (n = 81)	M	0.068	0.061	0.023	-0.061
	SD	0.934	0.885	0.839	0.754
どちらともいえない (n = 9)	M	-0.610	-0.552	-0.209	0.547
	SD	1.162	0.509	1.067	0.477

\*: p &lt; 0.05

表10 訪問看護婦と在宅療養患者に対するイメージにおける因子の相関

患者		f1: 充実した生活因子	f2: 孤独な生活因子	f3: 前向きな生き方因子	f4: 生活意欲減退因子
看護婦	r				
f1: 訪問看護婦の資質因子	r	0.298**	0.188	0.133	-0.127
f2: 訪問看護婦の専門性因子	r	0.123	0.078	0.111	-0.047
f3: 訪問看護婦の技量因子	r	0.004	0.058	0.030	-0.065

\*\* : p &lt; 0.01 (df = 88)

## 考 察

### 1. 訪問看護婦に対するイメージ

訪問看護婦に対するイメージは、全体的には肯定的であった。「14. 明るい」「16. 自由」「17. 楽しい」という漠然としたイメージは、訪問看護実習後にはより「そう思う」と肯定的に変化しており、実習したことによって訪問看護婦に対して好印象を持ったことが窺える。一方、「2. 高度な技術が必要」「10. 自立性が高い」「13. 体力が必要」という具体的な仕事の内容に関わるイメージは、訪問看護実習後には「思わない」と否定的な側に変化していた。訪問看護婦は、病院を離れてひとりで訪問するために、正確な観察力と質の高い看護技術と看護判断が求められている<sup>9)</sup>が、学生が高度な技術は思ったほどいらないと感じたのは、訪問対象が在宅で自然な死をむかえようとしている患者であったためと思われる。学生の中では、高度な技術イコール高度な医療機器の操作・管理と解釈されているのではないかと考えられる。次に、自立性の面では、訪問看護は看護婦が主体的に看護活動を

展開できる場<sup>5)</sup>であり、看護婦の持つ専門性が生かされる場である。しかし、訪問看護実習前後別因子得点の比較からも、訪問看護実習後には「訪問看護婦の専門性因子」において否定的イメージを示す結果であった。訪問看護の専門性については、西ら<sup>6)</sup>が、「理論的には、看護のうち療養上の世話は、医師の指示がなくとも看護婦が単独で行うことができることになっているが、在宅ケアの対象が患者であることから医師の行う医行為と密接な関連のもとで看護がなされることが必要である」と述べているように、法的にも医師との連携は無視できない現状がある。このことを、学生は訪問看護実習で感じだったのであろうと思われる。訪問看護婦の体力の面では、学生は訪問看護実習前には、数軒をひとりで訪問し、看護ケアを行う訪問看護婦は体力が必要と想像していたことが考えられる。訪問看護実習によって、在宅で行われる看護ケアは、患者の生活に合わせた方法で、介護者の負担も考え合わせて行うもので、看護婦側が主導権を持って実施するものではないことが理解されたものと思われる。



将来、訪問看護をしてみたいか否かの別で因子得点を比較したところ、訪問看護をしてみたい群は、すべての因子において肯定的イメージを示した。逆に、訪問看護をしてみたくない群は、すべての因子において否定的イメージを示した。将来、訪問看護をしてみたいか否かの選択に、訪問看護婦のイメージが影響することが示唆はされた。どちらともいえない群は「訪問看護婦の資質因子」において否定的イメージを示し、訪問看護をしてみたい群と比べて有意差が認められた。このイメージが、訪問看護をしてみたい気持ちにブレーキをかけているのではないかと推測された。

自分の終末期は在宅で療養したいか否かの別で因子得点を比較したところ、どちらともいえない群は、すべての因子において否定的イメージを示した。自分の終末期は在宅で療養したいか否かの選択にも、訪問看護婦のイメージが反映していることが示唆された。

## 2. 在宅療養患者に対するイメージ

在宅療養患者に対するイメージは、全体的には肯定的であった。さらに、訪問看護実習を体験することで、ほとんどのイメージは、より肯定的に変化している。訪問看護実習前後別因子得点においても、訪問看護実習後に「充実した生活因子」において肯定的イメージを示し、訪問看護実習前に比べて有意差が認められた。在宅療養をしている患者に対する理解の深まりが感じられた。

将来、訪問看護をしてみたいか否かの別で因子得点を比較したところ、訪問看護をしてみたくない群は、「前向きな生き方因子」において否定的イメージを示し、訪問看護をしてみたい群に比べて有意差が認められた。この在宅療養患者に対する否定的イメージが、訪問看護の希望を妨げる一因であることが示唆された。

自分の終末期は在宅で療養したいか否かの別で因子得点を比較したところ、3つの因子において群間で有意差が認められ、両群の学生が持つイメージに隔たりがあることが推察された。つまり、どちらともいえない群は、「孤独な生活因子」において在宅療養患者は孤独な生活であるとは認識していないものの、「充実した生活因

子」においては充実した生活ではないと否定的イメージを示し、さらに「生活意欲減退因子」では生活意欲が減退しているとの認識を示した。この認識が、どちらともいえないと態度を保留している要因のひとつであると考えられた。

## 3. 訪問看護婦に対するイメージと在宅療養患者に対するイメージの関連

訪問看護婦と在宅療養患者に対する各イメージにおける因子の相関をみると、「訪問看護婦の資質因子」と「充実した生活因子」に低い相関が認められた。学生は、訪問看護婦の資質が、在宅療養患者の生活の充実度を左右すると考えていると思われる。訪問看護は無理な延命を目的とするものではなく、疾病や障害を持ちながら充実した生活を送れるように援助すること<sup>7)</sup>が目的である。このことから考えても、訪問看護婦の資質の向上が、在宅療養患者の生活の充実に結びつくと認識は喜ばしい結果であった。

## 結 論

1. 訪問看護婦に対するイメージは、すべて肯定的イメージであった。訪問看護実習前後において学生の回答に有意差を認めたイメージは6項目で、訪問看護実習体験の影響が示唆された。
2. 訪問看護婦に対するイメージを因子分析した結果、3因子が抽出され「訪問看護婦の資質因子」「訪問看護婦の専門性因子」「訪問看護婦の技量因子」と解釈した。
3. 訪問看護婦に対するイメージについて、各因子に対する因子得点を、訪問看護実習前後別に比較したところ、訪問看護実習後に「訪問看護婦の専門性因子」において否定的イメージを示し、有意差が認められた。同様に、将来、訪問看護をしてみたいか否かの別と、自分の終末期は在宅で療養したいか否かの別で比較したところ、この学生の将来像に、訪問看護婦に対するイメージが影響していることが示唆された。
4. 在宅療養患者に対するイメージは、そのほとんどが肯定的イメージであった。訪問看護実習前後において学生の回答に有意差を認めたイメージは4項目で、訪問看護実習後に、

より肯定的イメージに変化した。

5. 在宅療養患者に対するイメージを因子分析した結果、4因子が抽出され「充実した生活因子」「孤独な生活因子」「前向きな生き方因子」「生活意欲減退因子」と解釈した。
6. 在宅療養患者に対するイメージについて、各因子に対する因子得点を、訪問看護実習前後別に比較したところ、訪問看護実習後に「充実した生活因子」において肯定的イメージを示し、有意差が認められた。同様に、将来、訪問看護をしてみたいか否かの別と、自分の

終末期は在宅で療養したいか否かの別で比較したところ、この学生の将来像に、在宅療養患者に対するイメージが反映している傾向が認められた。

7. 訪問看護婦と在宅療養患者に対する各イメージにおける因子間の関連をみると、「訪問看護婦の資質因子」と「充実した生活因子」の間に正の低い相関が認められた。

本研究の要旨は、日本応用心理学会第63回大会（1996）において、発表した。

## 文 献

- 1) 田中良江, 高橋千枝子, 安田理子, 平田せい子, 小石川智恵(1991)退院を回避する高齢患者の“家族関係”に起因する問題—「生活力量の枠組み」を用いた調査結果から—。月刊ナーシング, 11(9), 32—35.
- 2) 島田妙子(1989)招かれざる客にならないために。老人とホームケア, 初版, 医学書院, 東京, pp37—42.
- 3) 水島恵一, 上杉 喬, 大石 昂, 宮崎清孝, 鈴木晶夫, 丹治哲雄, 大熊保彦(1988)イメージとは何か。水島恵一, 上杉 喬編, イメージの基礎心理学, 初版, 誠信書房, 東京, pp1—6.
- 4) 岡島重孝, 中田まゆみ, 宮森 正, 中村隆一, 内田千佳子, 中溝明子, 落合多佳子, 芝崎 登, 隆島美智子, 植松豊子, 守田喜代子, 瀬川信雄, 小坂好文, 飯島亜矢子, 太田博子, 相澤かおる, 桜井 攻, 杉田悦子(1989)在宅ケアと訪問看護に関する基本事項。岡島重孝, 中田まゆみ編, 看護必携シリーズ第15巻訪問看護—患者・家族の主体的セルフケアをめざして—, 初版, 学習研究社, 東京, pp4—12.
- 5) 福間和美(1994)医療機関における訪問看護内容と医師の指示関係—京都府内の医療機関における訪問看護事業の実態調査から—。第25回日本看護学会集録—地域看護—, 108—110.
- 6) 西 三郎, 星 旦二, 近藤紀子, 杉浦芳子, 石井松代, 宿谷幸治郎, 高崎絹子, 野川とも江, 伊藤淑子, 木下安子, 石川左門, 島内 節, 川村佐和子(1988)在宅ケアにおける専門職の責任。島内 節, 川村佐和子編, 在宅ケア—基盤づくりと発展への方法論—, 増補版, 文光堂, 東京, pp233—250.
- 7) 季羽倭文子(1990)訪問看護活動の意義と専門性。看護 MOOK34 訪問看護, 1—6.